

日本民家園だより

特集「旧北村家住宅」

vol.71

1687
企画展示「貞享四年-年号のある民家・重文旧北村家住宅-」
2009年7月1日(水)～11月29日(日)
『日本民家園収蔵品目録12 旧北村家住宅』刊行

はだの 【秦野たばこと旧北村家住宅】

【はじめに】

昭和43年(1968)に民家園へ移築・保存された旧北村家住宅は、もとは神奈川県秦野市に建てられました。秦野地域は神奈川県の西部に位置し、丹沢山塊などの山々に三方を囲まれた扇状地です。かつてこの地は、「秦野葉(波多野葉)」と呼ばれる高級な葉たばこの産地として知られていました。

【南蛮船に乗って来た“たばこ”】

たばこが日本に初めて伝わったのは、室町時代の天正年間(1573-92)といわれています。南蛮船によりもたらされたのをきっかけに広まり、江戸時代の寛永年間(1624-44)には、たばこの葉を細かくきざんで煙管で吸う「きざみたばこ」の喫煙習慣が定着しました。それにともない栽培も盛んになり、土地の条件に合わせてたくさんの品種が産み出され、煙管などの喫煙用具も小洒落たものが多く作られました。こうした環境のなか、健康のため喫煙を制限する傾向が強い近年とは反対に、身分や年齢をこえて喫煙を楽しむ人々のすがたが増えていったのです。

たばこの葉は農家で栽培され、各地域の小さな業者が加工し、仲買人を通して流通していましたが、明治38年(1898)に政府による専売制が敷かれました。当時、葉たばこの種類は全国で70種以上あり、これらの品種は、のちに海外などからもたらされた品種と区別するため、「在来種」と呼ばれています。

【海外にまで知られた銘葉“秦野葉”】

数ある在来種のなかで、三大銘葉のひとつとして知られたのが秦野地方の「秦野葉」でした。その品質は明治時代になって来日した外国人にも評価され、ロンドンへ輸出された時期もあったそうです。

秦野地方における葉たばこ栽培の歴史は古く、一説には、江戸時代初期に肥前から修験者が種子を持ち帰ったことから栽培が始まったそうです。史料によれば、おそくとも1600年代後半にはすでに行われており、明暦(1655-57)頃には商品化するまでになりました。

秦野地方に葉たばこ栽培が定着した背景には、傾斜地が多く、水が豊富でなかったことから、水田づくりに適していないという土地柄がありました。秦野の葉たばこ生産量は順調に伸び、明治・大正期に

は農家の最も大きな収入源となりました。大正時代には、葉たばこ輪作すると良い葉ができるということで、落花生の栽培も盛んになりました。旧北村家住宅のあった西秦野村(現:秦野市)は、秦野地域のなかでもとくに葉たばこ栽培が盛んだったようです。第二次世界大戦後は、上記の「秦野葉」に加え、「米葉」という種類も栽培するようになりました。昭和23年(1948)には「たばこまつり」が開始されるなど、同30年ごろまで葉たばこは秦野地方の経済を支える最も大きな柱でした。

ところが、高度経済成長期(1955-73)は、他の地域と同様に、秦野地方の農業にも変化をもたらしました。農家の労働力は、市が積極的に地元へ誘致した工場や、都心の企業に吸収されてしまうようになります。葉たばこの栽培はたいへん時間と労力が要る仕事ですから、男手がなくては続けられません。こうして、秦野葉は次第に栽培されなくなり、昭和59年(1984)には秦野に葉たばこを作る農家が一軒も無くなりました。

【北村家の葉たばこ栽培】

北村家では秦野葉と少量の米葉を、何反もの畑で栽培していました。昭和



移築直前の旧北村家住宅

27年(1952)に北村家へ嫁いだ北村喜久枝さんは、葉たばこ栽培をやめる昭和30年までの3年間、葉たばこ栽培を手伝いました。

葉たばこ栽培は1年がかりの作業で、まずは1・2月ごろから何度も山へ入り、大量の落葉を取ってくることから始まります。そして落葉を肥料と混ぜ、ニワに作った苗床に高く積みみます。3月になると葉たばこの種を苗床へ丁寧に撒きます。苗床から芽が出て来たら、毎日ピンセットで間引きしたり虫を取ったりして、4月中旬に畑へ植え替えます。

作業の最盛期は夏場で、6月ごろからさらに忙しくなります。良い葉を育てるため、脇芽が出てくると雨天でも畑へ行って取り除きます。忙しい上、ヤニで顔や腕がベタベタしてしまう過酷な作業でした。

収穫は7月はじめ頃から始まります。この時期は、

大人も子どもも毎朝3時ごろから起床し、朝食の前までに葉を取ります。収穫した葉は1枚ずつ細目に挟み、吊るして延べ10日間ほど天日干しにします。その間、葉を濡らしてはいけないので、雨が降ると物置などに急いで入れなければなりません。夕立の多い季節ですから、雨に当てないようにするのが大変でした。

暑い中、毎日収穫に追われている間にも、先に収穫した葉はやがて金色に干しあがります。すると、その葉を一枚ずつ丁寧に伸す作業を行います。伸した葉は1～3級品に選別して、物置にきれいに積みますが、その後も通気が良い



ニワで葉たばこを干す

よう、しょっちゅう積み替える作業が必要でした。葉たばこは作業のタイミングを半日でも間違えると黒っぽく変色してしまい、等級が落ちて買取り価格が大きく変わってしまいます。作業の忙しさに加え、タイミングを逃さないため、この時期は夕食後の「夜なべ」と朝食前の「朝づくり」が欠かせず、その忙しさで「ご飯を噛んでいる暇もなかった」そうです。

こうしたすべての作業は、12月中旬の納付の日までに終えなければなりません。北村家もお父さんがウシグルマに葉たばこを詰めた枠をたくさん積んで、渋沢の専売所まで納付に行きました。

専売所では係の人が等級を付け、翌日には納付者に現金が支払われます。この日のために大人も子どもも一年中苦勞したのですから、秦野の人びとにとって納付の日は特別なものがありました。

納付の帰り、お父さんは受け取った現金で家族全員の衣服や靴を買います。足袋やオーバー、長靴など、両親がふだんから子供の持ち物を見ていて、買い換え時だと思ふものをこの日にまとめて買うのです。それらを手に入ると、一緒に買った正月用品とともにウシグルマに積んで持って帰ります。他の家族は、お父さんの帰りを、首を長くして待っていました。

[民家園内の古民家と葉たばこ栽培]

ところで、民家園内の古民家を見ると、北村家のほかに、山梨県甲州市塩山から移築された旧広瀬家

住宅、岩手県紫波郡紫波町から移築された旧工藤家住宅でも葉たばこの栽培が行われていました。

旧広瀬家住宅 (山梨県甲州市塩山)

広瀬家の旧所在地周辺では葉たばこの栽培が盛んで、地名にちなんだ「萩原たばこ」の名称で出荷していました。この「萩原たばこ」は殊に辛いことで知られていたそうです。広瀬家の葉たばこ栽培は、明治38(1905)年生まれの広瀬保さんが物心ついた頃には、もう行っていませんでした。しかし、かつて葉たばこ栽培を行っていたことをうかがわせる以下のようなエピソードが伝わっています。

- ・葉たばこの栽培を終えた後、たばこ畑を潰して桑を植え、養蚕を盛んに行った。
- ・葉たばこを切る包丁の柄が短いことから、かつてこの地域では短いことを「たばこ包丁の柄のようだ」という言い方をした。
- ・保さんの曾祖母の時代は、物置の隅のカマスに残っていた古い葉を刻み、煙管で吸っていた。
- ・広瀬家よりも下方の集落には、「問屋」という屋号の家が残っている。
- ・虫除けとしてお雛さんの箱の中に葉が入っていた。

旧工藤家住宅 (岩手県紫波郡紫波町)

かつて工藤家とその周辺の家では葉たばこの栽培を盛んに行っており、たばこの栽培は養蚕とともに貴重な現金収入源でした。明治41年(1908)生まれの工藤ソノさんによると、工藤家で栽培を始めたのは少なくとも大正11年(1922)以前のことで、葉たばこの畑は、それ以前は桑畑だったそうです。

栽培していた品種はバレー種で、背丈が2メートルにもなるものでした。そのため、作業中はずっと上を向いていなければならず、日光が直接目に当たって目を悪くする人もいたそうです。そんな大変な作業でしたが、葉たばこの栽培は大きな現金収入源ですから、どの家も頑張っていました。工藤家も家族全員で作業を行い、収穫の時期には家中に葉を吊るし、部屋の中を通るときにはかがんで歩いたそうです。収穫した葉を1枚ずつ伸ばして出荷する作業は子どもたちも冬休みの間中手伝いました。ソノさんの息子で昭和23年(1948)生まれの宗吾さんは、手が黄色いやニだらけになり、何ヶ月も取れなかったことを覚えています。

しかし、戦後に葉たばこの商品価値が下がると、次第にたばこ畑を果樹畑に切り替える家が増え、工藤家も昭和40年代のはじめに栽培を終えました。

(野口文子)

旧北村家住宅関係資料



ナタネドオシ

脱穀した菜種をふるい、ゴミなどを除いた。黒いのは油のため。秦野は菜種の栽培が盛んで、北村家では油搾りも行っていた。



イトマス

墨書「神奈川県官内相模国大住郡堀山下邑明治十五年午七月吉日持主 北邑利八」



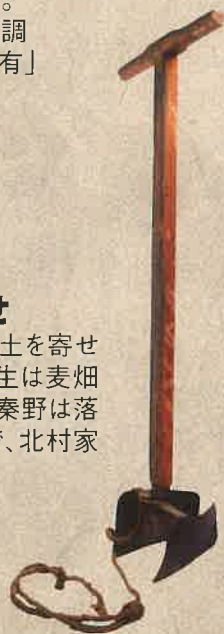
タイヒトオシ

煙草の苗床に堆肥を撒くとき、これを使って細かくふるい分けた。墨書「昭和四年度伍月二日新調大字堀山下梶ヶ谷戸北村氏所有」



タバコツミ

専売局に煙草を納付する際使用。下にコモを敷いて葉を重ね、最後にまたコモをかぶせ縄をかける。米葉用で、秦野葉には使用しなかった。



落花生用土寄せ

落花生を播いた後、土を寄せるのに用いた。落花生は麦畑の畝の間に播いた。秦野は落花生の栽培が盛んで、北村家では3反作っていた。

ショイバシゴ

稲・麦・落花生・煙草など農作物のほか、堆肥・薪・落ち葉などの運搬に使用した。



苗床の穴あけ

苗床に穴をあける道具。土と堆肥をならして葉煙草の苗床を作る際用いた。

〈展示協力〉 秦野市市史資料室 かすみがうら市郷土資料館



日本民家園だより vol.71 発行：平成21年7月1日

川崎市立日本民家園

URL <http://www.city.kawasaki.jp/88/88minka/home/minka.htm>

〒214-0032 川崎市多摩区柵形7-1-1 TEL 044(922)2181 FAX 044(934)8652 交通:小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩13分

開園時間 [11~2月]午前9時30分~午後4時30分 [3~10月]午前9時30分~午後5時 入園は開園30分前まで

休園日 毎週月曜(祝日の場合は開園)、祝日の翌日(土・日曜の場合は開園)、12月28日~1月3日

入園料 一般500円、高校・大学生300円、65歳以上300円(川崎市在住の方無料)、中学生以下無料